

「貧困と闘う子ども労働者たち」を視聴して

海外番組「僕たちも学びたい～貧困と闘う子ども労働者たち～」を視聴した。

家の貧困や借金返済（債務労働）のために、先進国への輸出を目的としたケニアのコーヒー農園、インドの大理石採石場や絨毯作り、また、インドネシアの街の廃棄場でのゴミあさり、メキシコの売春のために街角の立つ少女たち、アメリカとメキシコの国境地帯の砂漠地帯での大規模農園などで働き、学校にも行けない「児童労働」の実態を伝える番組であり、「児童労働は、世界に残る最後の奴隷制」という。

また、児童労働の社会的背景として、後進国は世界銀行等からの融資を受け、その債務返済のために国民の生活や子どもの教育に十分な国家予算を回すことができないという、先進国と後進国の格差問題の仕組みにも迫り、「こうした悲惨な状況から解放される最大の武器は、子どもたち自身が教育を受けること」と訴え、「『幸せな子ども時代を返してほしい』という子どもたちの切実な声をもとに、どうすれば平等な世界を作ることができるのか」を問いかける番組でもあった。

後進国は、先進国への第一次産業物品の輸出のために、例えば、大規模農園を採用し多量の有害な農薬（先進国からの輸入）等を使用するために、労働する子どもたちの健康が損なわれている実態にも触れていた。

また、児童労働をやめさせる実績をあげているいくつかの NGO 活動等も紹介されていた。

番組では、アフリカ大陸全土で植林活動を行い、民主化に取り組み「持続可能な開発、民主主義と平和への貢献」ということで、2004年のノーベル平和賞のワンガリ・マータイ女史がインタビューに答えていた。

この女史は、京都議定書等の会議で来日した折に、日本語の「もったいない」という言葉の精神に感銘を受け、この「もったいない」という精神・言葉を世界に広めようと、ある番組で呼びかけていたのを見た記憶がある。

確かに、先進国民の限りない欲望のために後進国民が貧困を背負わされ、ひいては「児童労働」を派生させていると考えれば、「もったいない」の精神が世界に広がることは意味があるように思う。

「自分」という熟語の語意は、本来仏教用語の「自ら食する分をわきまえていること」とか。

「もったいない」は、「自ら食する分」以上のことから派生した言葉かも……と、ふと思った。